

< forum >

< わける > と < わかる >

教育学部美術学科 藤川 喜也

私は日頃、抽象形態を用いてデザインしたり、それだけで作品を仕上げたりしている。いわゆる「わからない絵」というのに属している。そこでよく聞かれるのが「どうして描くのですか？」また「何で描くのですか？」ということである。つまり、技法と材料の点から観者は作品を理解しようとしているのである。この質問は作者にとって手品の種あかしを求められているようで、あまり答えたくないものであるし、作品で表現したいこととはあまり関係のないことだといいたいくなる。

またよく聞かれるのが「何が描いてありますか？」ということである。人物、静物、風景等の具象形態による造形表現ではこうした質問はまずおこらないだろう。抽象造形には具象表現と同じ意味での「何を」描いているというものはない。抽象造形の作品には抽象概念とか、目には見えない事柄を題名にしているものがあるが、私にはこれは抽象造形と馴染みのうすい観者と作品とをつなぐための方便と思える。

それでは抽象造形は何を表現しているのだろうか。作品の前に立つと、わかる、わからないは別にして様々なものが目に入ってくる。そして色はどう、形はどう、というように色と形とを分けてみることができる。すると色についても好きな色、嫌な色とか、あるいは明るい色、暗い色というように心理的、物理的、あるいは生理的にと様々な観点にわけてみることができる。また形についても、単純な形か、複雑な形とか、直線からなりたっているか、曲線からなりたっているとか、その配置は垂直、水平方向を主体にしているか、あるいは斜めの方向を主体にしているかというように造形作品を構成している要素を様々な観点からとりだすことが出来る。つまり造形作品を客観的に分析することができる。

こうした分析は専門家でない人にはあまり関係のないことであろうが、造形作家は意識的にしろ、無意識的にしろ、このような造形要素のあり方を選択し、決定することで物理的存在である作品を仕上げているのである。

モデルや現実の風景よりも美しいものを表現しようとする具象表現と異なり、こうしたモチーフのない抽象表現では純粋な造形要素に対する関心は当然高くなっていく。むしろこれが中心的なモチーフになっていくはずである。

抽象造形が表現しようとしているものを間接的に説明すれば、造形手段によらなければ表現出来ないもの、文字やことばでは表現出来ないものが表現されているといえる。従ってそれを言語で説明しようとするればエントロピーの高いものといえる。造形表現でなければ表現出来ないものが、わかればその作品はわかったことになるが、これはことばで説明しにくいものである。

しかし、造形表現でなければ表現出来ないものも、造形要素の分析からその本質に迫ることが出来る。一方、結局、その両者は接近はするが平行線だと思わせるところがある。

従来、日本の伝統的な芸術観はわけてわかることを軽視し、直感的にわかることを重要視してきた傾向がある。私は直感的理解は独自性を育てたが、新しい様式を展開させる点で越えがたい限界をつくったと思う。作品を理解するには直感的にわかるということは大切であるが、新しい作品の創造には既存の作品の分析的な理解が不可欠であろう。なぜなら造形表現の展開の多くは造形要素の新しい組合せ、新しい意味づけによっているからである。